

とも歩む

45

よこ
に一
人レ
で
6リ
ム
*る
ラ

滝脇憲

家族支える「地域のつながり」

私たちが、東京都東部で行っている単身高齢者らの住まいや生活、互助の関係づくりの支援は、どれも制度化されていない。しかし、独り暮らしで低所得の高齢者が増える将来、こうしたインフォーマルなケアはますます必要になる。老々介護の負担が重い高齢夫婦だけの家庭や、地域で孤立する子育て家庭も増えている。家族を支える社会の絆が求められているのだ。

先日、私たちが運営する「互助ハウス」(東京都墨田区)で入居者が1人亡くなった。一軒家に、高齢の単身男性3人が暮らしていた。残った2人のうち、働いていないHさんは、ダイサービスのない日は日中、1人になってしまふ。それを知った近所の奥さんが、「寂しくなるわね」と声をかけてくれた。奥さんも夫の介護中で、互いの体調を気遣いあったという。

別のアパートに住む60歳代の男性Iさんは、地域の子どもを見守り、声かけをしている。そのおかげか、Iさんがケアをした時、顔見知りの子の母親と一緒に救急車に乗ってくれた。私たちの活動も、地域の互助に支えられているのだ。

団塊世代が後期高齢者になる2025年に向け、各地で「共生社会」を目指す動きがある。共生社会とは、このコラムで紹介してきたように、失業した若者も人生の最後を迎えようとしている人も、皆に「役割」があることではないか。私たちも、家族の肩の荷が軽くなるよう、地域のつながり作りに役立っていきたい。

43歳。NPO法人「自立支援セン
ター」の理事。